

## エーリヒ・ケストナー ～叙情を核心に抱いた反骨精神

藤 田 晴 央\*

Erich Kästner

～ Rebellious spirit with lyrical core

Haruo FUJITA\*

Key words : 焚書	book burning
親子愛	Parent-child love
貧しい階層への共感	Sympathy with the poor
禁止への抵抗	Resistance to ban
叙情的精神	lyricism

エーリヒ・ケストナー<sup>(注1)</sup>は児童文学の世界を代表する作家のひとりである。個々の作品については後述するが、それらのよく知られた作品の背後には、彼の生きた時代と彼の生きた国家があった。それがどのような時代でどのような社会であったのかに触れながら、彼の作品を考えてみたい。児童文学のみならず、詩をはじめとしたケストナー文学全体を支える芯は何なのか。そのことを考えることは、世界にふたたび軍備増強の流れが強まり、表現の自由を認めない国家が強大になってきている今日、私たちにたしかな示唆を与えてくれるであろう。

### 1. 焚書事件<sup>(注2)</sup>

1933年5月10日、ナチス<sup>(注3)</sup>の突撃隊、学生、警察がドイツ各地の図書館に入り、彼らが考える「反国家的」な図書を持ち出し、広場に積み上げて燃やした。首都ベルリンでは五千人の若者たちがナチス突撃隊の制服を着て、焚書のための広場に集まり、ベルリンだけで二万五千冊の図書が燃やされた。フリードリヒ・ヴイルヘルム大学（現在のフンボルト大学）と国立歌劇場の間の広場が

その場所で、四万人の群衆が集まりその様子を見守った。ナチス宣伝相のゲッベルスは「ここに非ドイツ精神は葬り去られる」と演説、一人一人、作家、詩人、思想家の名前を読み上げていった。その中にエーリヒ・ケストナーの名前もあった。この時、ケストナーも群衆に混じってそこにいた。彼は焚書事件について次のように書いている。

「わたしの本は、ベルリンの国立オペラ劇場わきの大広場で、ゲッベルス氏とかいう人によって、陰惨に大げさにはなばなく焼かれた。象徴的に永久に葬り去られるべき二十四人の著作家の名を、彼は勝ち誇るように読み上げた。二十四人の中でわたしは、この芝居じみた厚顔無恥の所業に立ち会うべく親しく現場に現れたただひとりであった。」

（ケストナー『自著検討』より、高橋健二訳）

めらめらと燃え上がる炎に照らされたためか、群衆の中から「あすこにケストナーがいるわ!」という声があがり、ケストナーは人ごみをかきわけてその場を脱出した。

（クラウス・コードン『ケストナー ナチスに抵抗した作家』より）

\*東北女子大学

当の作家にとっては不快でもあり危険でもある焚書の現場にわざわざ立ち会っていることは、特異な行動と言っているだろう。

この日のケストナーの振る舞いは、多くの作家たちが、ドイツから脱出していったのにケストナーがこの焚書からますます燃え盛るナチスの炎の中、十二年の長きに渡りドイツ国内にとどまり続けたことと照応しているのではないだろうか。ある一日の出来事だが、それがケストナーという作家の在り方を象徴しているような気がする。

単に焚書の対象になったといっても、現在ではそのことの真の恐ろしさが伝わらないかもしれない。「焚書」の持つ恐怖を具体的に記した書物がある。

ユルゲン・ゼルケの『焚かれた詩人たち』は、ナチスが焚書・粛清した文学者たちの肖像を描いた労作である。焚書の対象になった文学者への弾圧は、その著書を炎に投げ入れるだけでなく、文学者自身を逮捕し、時には拷問し収容所へ送る苛酷なものであったことを、一人一人の文学者の追跡取材を通して伝えている。亡命した人も、自殺した人も少なくない。そのようにナチスのもとで粛清された文学者は数百人に及び、十二年間の空白をへて、そのまま忘れられてしまった人も少なくないことがわかる。

たとえば、反戦劇『変容』の作家エルンスト・トラー<sup>(注4)</sup>は、社会主義の活動家でもあったために逮捕され刑務所に入れられている。彼は社会民主党にもドイツ共産党にも入党せず、「革命的平和主義者」として、ヒトラーに警告を発し、独裁を阻止しようと全左翼の連帯を求めた。この呼びかけには、物理学者アイシュタイン、作家ハインリヒ・マン、そしてケストナーも参加している。

トラーは、国会炎上事件（1933年2月27日）の夜、突撃隊に自宅を襲われたが難を逃れ、スイスに亡命し、ヨーロッパ各地やアメリカで亡命者の救助活動をした。しかし、1939年にニューヨークで自殺している。亡命すなわち安寧ではなかったことは、1939年、ブラジルで果てたシュテファン・ツヴァイクほかの自殺が物語っている。

## 2. 詩人ケストナー

ケストナーは1933年にドイツでの出版禁止、1942年にドイツおよび外国での執筆禁止処分を受けている。それは1945年のナチス政権の崩壊まで続く。

そもそもケストナーはどのような執筆活動で焚書の対象となったのであろうか。1928年に出版された『エーミールと探偵たち』が対象とされたわけではなかった。それ以前からケストナーは、多くの詩を新聞に発表していた。第一詩集『腰の上の心臓』は1928年、『エーミール』に先立つもの。続いて1929年、詩集『鏡の中の大騒ぎ』、1930年、詩集『ある男が通知する』、1932年、詩集『椅子の間で歌う』と刊行していて、これらがことごとく多くの読者を獲得している。

詩においてケストナーはみずからの貧しかった生い立ちに立脚し、社会、そして人間の滑稽さを皮肉った。社会の片隅に生きる人たちに注意を向ける事、そして、社会の危険な流れにシニカルな警鐘を鳴らすこと、それが彼の詩であった。

これらの詩集から自選詩集的に編んだのが『ドクター・エーリヒ・ケストナーの叙情的家庭薬局』である。これは、日本では『人生処方詩集』というタイトルで知られている。

原題は“Doktor Erich Kästner Lyrische Hausapoke: Gedichte für den Hausbedarf der Leser”。つまり、Lyrische Hausapoke「叙情的家庭薬局」(の)「読者の家庭の必需品の詩」であって「叙情詩」ではない。しかし、日本のケストナー紹介の第一人者・高橋健二は「ケストナー博士の叙情詩家庭薬局」としている。またドイツにおける評伝の類でも彼の詩を「叙情詩」とした文脈をみる<sup>(注5)</sup>。一方、ケストナー愛好者の一人、池内紀は「叙情ではなく叙事的な詩といえる。日本の詩の伝統や作風にはあまり見られないもの」(池内紀『自由人は楽しい』より)と語っている。

叙情か叙事か。ケストナーの詩がどんなものであるかをみてみよう。

詩集『叙情的家庭薬局』の冒頭に置かれた詩で

ある。長い詩なので、ここでは全七節のうち一節目、四節目、五節目、最終節を掲げる。

### Das Eisenbahngleichnis

Wir sitzen alle im gleichen Zug  
und reisen quer durch die Zeit.  
Wir sehen hinaus. Wir sahen genug.  
Wir fahren alle im gleichen Zug.  
Und keiner weiß, wie weit.  
(略)

Auch er weiß nicht, wohin er will.  
Er schweigt und geht hinaus.  
Da heult die Zugsirene schrill!  
Der Zug fährt langsam und hält still.  
Die Toten steigen aus.

Ein Kind steigen aus. Die Mutter schreit.  
Die Toten stehen stumm  
am Bahnsteig der Vergangenheit.  
Der Zug fährt weiter, er jagt durch die Zeit.  
Und niemand weiß, warum.  
(略)

Wir reisen alle im gleichen Zug  
zur Gegenwart in spe.  
Wir sehen hinaus. Wir sahen genug.  
Wir sitzen alle im gleichen Zug.  
Und viele im falschen Coupé.

以下に拙訳を記す。

### 鉄道列車

私たちはみんな同じ列車に乗り  
この時代を貫いて旅をしている  
見あきた車窓を眺めながら  
私たちはみんな同じ列車で向かっている  
どれほど遠くまでゆくのか誰も知らない  
(略)  
車掌も知らない どこへ行くのかを

彼は口をつぐみ車室を出てゆく  
汽笛が鋭く泣き叫び  
列車がゆっくり静かに止まり  
死者たちが下車してゆく

ひとりの子どもが下車し母親が悲鳴をあげる  
死者は無言で立っている  
過去のプラットフォームに  
列車はまた動き出し 時代の中を走る  
誰も知らない なぜ走るのかを  
(略)

私たちはみんな同じ列車に乗っている  
今のままの未来へ  
見あきた車窓を眺めながら  
私たちははみんな同じ列車に座っている  
多くの人は誤った車室に

音韻を表しづらい日本語では伝え難いが、前掲の原文では、第一節の一行目 Wir、三行目・四行目の Wir が、もうひとつ二行目 und と五行目 und が頭韻を踏んでいて、一行目末尾 Zug、三行目末尾 genug・四行目末尾 Zug が脚韻を踏んでいる。この詩は七つの詩節から構成されているが、ひとつひとつの詩節が、ABA'A'B'の形をとっている。二行目と五行目の行頭が Die と Und、zur と Und になっている場合もあるが、全体としては頭韻、脚韻を整えている。このような交叉韻＝クロイツライム (Kreuzreim) は、ケストナーの理解者でもあったヘルマン・ヘッセを始め多くの詩人たちが愛用した詩形だ。

その韻律を日本語で味わうことは難しいが、ケストナーの伝えたいことは、暗喩 (die Metapher) や直喩 (das Gleichnis) の形を通して深いイメージを伴って伝わってくる。

最終節の二行目“Zur Gegenwart in spe.”のspeは一般的な『独和辞典』には載っていない。ラテン語から来た言葉で希望や期待を意味するが、「名詞(N) + in spe」の場合、「将来Nになるかもしれない」という意味になるので、ここは、「将来、Gegenwart (現状) になるだろう」ということだ

から、先達の「現在のところは、希望をもって。」（高橋健二訳）「現在は、希望をもって」（小松太郎訳）ではなく「今のままの未来へ」とした。高橋、小松訳では詩の流れから浮き上がってしまうし、この方がベシミスティックな詩脈に合っているのではないだろうか<sup>(注6)</sup>。

『ドクター・エーリヒ・ケストナーの叙情的家庭薬局』は1936年の出版である。すでに1934年にはヒトラーは全権を掌握して次々と独裁政治を発動していた。しかし、この詩集の大半は1933年以前に書かれたものである<sup>(注7)</sup>。そのような時代（die Zeit）を背景にしてこの詩を読むと、ケストナーの予見性と危機感がひしひしと伝わってくる。1938年にはユダヤ人の強制収容所への強制収容が始まり、それは大量殺人につながっていた。まさしく「死者たちが下車してゆく」のである。

この詩では、そうした出来事への予見性と同時に、時代への認識が重要だ。「私たちははみんな同じ列車に座っている／多くの人は誤った車室に」。この比喩こそ詩人の眼差しであり、言葉の力だ。そして、この詩には、鉄道列車という移動するものから張りつめたリリシズムが発せられている。

### 3. 核心部にあった叙情

ケストナーに『小さな男の子の旅』という短編がある。新聞に辛辣な風刺のきいた詩を書いていたころ、まだ『エーミールと探偵たち』が本になっていないころに書いたものである。

主人公は「男の子」。入院中の母が入院している病院に手術の費用250マルクを届けるために、一人で駅に。男の子は、花屋で見舞いの花を買う。駅長が男の子を市電に乗せ、車掌に行先を教える。ここで駅長が男の子に「お金をしっかりみはってるんだぞ」と声をかける。あの『エーミールと探偵たち』と似ている。けれど、この後の展開は違っている。電車の中で男の子は乗客が見ている中で紙幣を数える。花代と電車代を払ったので残りは245マルク。やがて目的の停車場に着いて、車掌に教えられて下車。男の子は病院で看護

婦にお金を差し出し病室へ。お母さんは黒ずんだ顔をして苦しそうな息をして眠っている。男の子は部屋を出て看護婦に「お母さんに言っておいて、僕が泣かなかったって」と言って待合室に入る。すぐに看護婦は待合室の中から男の子の泣き声を聴く。看護婦の目にも涙。院長が通りかかり、男の子を「もう少しここにいさせてあげよう。母親はおそろしく心臓が弱っている。ひよっとしたら……」と言って口をつぐむ。（榎直子訳を要約）

物語はそこで終わる。余韻の残る短編だ。冒頭の駅長とのやりとり、電車の中での無邪気な振る舞い、病院に着いてからのけなげな言動と、最後の待合室のドアの中から聴こえるすすり泣きの対比が胸をしめつける。ここには、アクの強い泥棒グルントアイス氏は出てこない。泥棒を追いかける大勢の子どもたちも出てこない。静かな、小さな物語である。そこに「叙情」がある。

この“Ein kleiner Junge unterwegs”（直訳では「途上にある小さな少年」）が発表されたのは1927年。

翌年の1928年、ケストナーは児童書の出版社ウィリアムス社の社主エーディット・ヤコブゾーンから子ども向けの本を書くことをすすめられ『エーミールと探偵たち』を書いている。このときケストナーはエーディット・ヤコブソンに「なんだったってまた私にそんなもんが書けるだなんて考えたですか」（初見基訳、『大きなケストナーの本』より）と答え、これが児童文学を書いた初めてであるかのような印象を与えることを記している。しかし、このときヤコブゾーンが「あなたの掌編小説にはよくこどもが出てくるじゃないですか」と言っている。つまりケストナーは『エーミールと探偵たち』以前に『小さな男の子の旅』のような短編を書いていたのである。

### 4. ナチス台頭期～『ファビアン』

ケストナーにはもうひとつの側面がある。それが1931年に刊行された『ファビアン』の世界だ。

ケストナーの児童文学作品だけを知っている人



には「意外な」小説だろう。1931年の出版ということがここでは大きな意味を持っている。私たちは、ナチス台頭期からナチスが完全に権力を握った時代に目を奪われがちだが、その直前の数年間こそ、ドイツ現代史にとって重要な時期である。

1918年、ドイツ革命が起り帝政は廃止され、第一次世界大戦が終結し議会制民主主義のヴァイマル共和体制のもと新国家が樹立される。同時にドイツは莫大な借金を背負った敗戦国となる。異常なインフレなど経済が混乱する中、社会福祉と労働者の権利を獲得しようとする民主主義勢力と、富裕層の権益拡大とドイツ至上主義を標榜する復古主義勢力がつばぜり合いを繰り返す。一方、政治・経済が混乱するなか、大衆文化や芸術が狂い咲く。建築、音楽、舞踊、映画、絵画、彫刻、文学と多岐に渡ったドイツ表現主義の活発な展開も1920年代のもので、ベルリンはこの「ドイツの黄金の20年代」を象徴する都市であった。『ファビアン』はそうした時代の空気をよく伝えている作品としても貴重なものだ。

文体としては、表現主義の影響もみられ、どぎつい比喩や、乱脈な性的描写が差し込まれながら人間関係の急激な展開で物語が運ばれてゆく。主人公ファビアンは、物語の前半では宣伝企画の会社員であり、怪しげなクラブで知り合った女性にその住まいまで連れて行かれたりする。友人のラブーデは社会主義に共鳴している。友人ミュンツァーのいる新聞社では社会情勢に関する議論がたたかわされている。小説の途中でファビアンは解雇されて仕事探しをしている。彼は駆け出し女優のコレネリアとの危うい関係や親友の自殺などに悩まされながら、ベルリンの街をスリリングな体験を重ねて日々を生活している。登場人物たちとの会話を通して、国家の現状に対しての鋭い批判と考察も記されている。ファビアン自身はプロレタリアの味方だが、プロレタリアートが天下を握っても「人類の理想は依然として実現されやしない」とも考えている。

街の出来事として当時の政治状況も活写されており、中でも興味深いのは、夜の街でナチス支持

の男がインターナショナル<sup>(注8)</sup>を支持している労働者を銃で撃つのだが、実はナチスの男もケガをしており、重症を負った二人をファビアンと友人がタクシーに乗せて病院に運ぶくだりだ。ここでファビアンは二人に向かって「ドイツはこれ以上こんな状態をつづけることはできないという点では、われわれの意見はみんな一致しているんだ。維持することのできない状態をいま冷酷な独裁政治によって、永続させようとするのは、一つの罪悪だ。忽ち罰を受けるにきまつてる。」(小松太郎訳)と語っている。

第二次世界大戦後、ナチスが登場する文学作品では、当然のことながらナチスはすでにあのホロコースト<sup>(注9)</sup>を行った独裁政権として登場する。児童文学作品としてよく知られている『あのころはフリードリヒがいた』<sup>(注10)</sup>は、ナチス台頭の過程を描いていて重要な作品だが、権力掌握後の悪魔性がほぼ全編を覆っている。それに対して『ファビアン』のナチスは、あくまでも「一方の勢力」である。この小説は、執筆が1930年9月からなされ1931年7月に完成し10月に発売されたもの。今、戦後、そして現在の視点から読むと、その頃のドイツ国民の受け止め方はこのようなものだったのであろうという妙にリアルな感じを与える。むろん、作者の立ち位置は独裁政治の否定にある。その政治理念とは別に、ここには、その時そこにいたからこそ書ける不思議な「禍々しいものの日常性」が活写されている。

ケストナーはなぜ亡命しなかったのか、という問いがあるが、その答は、この『ファビアン』から窺うことができる。彼は「禍々しいものの日常性」は、そこにいなければ見とどけることができないことを知っていた。そして、1933年のナチスによる焚書の対象になりながらも、それから12年間、終戦までドイツ国内にとどまった。執筆禁止処分を受けたり、二度、ナチスに逮捕されたりしながらも、亡命せずに踏みとどまった。そのことを手放しで称賛することはできない。一定の妥協があったであろうことが想像されるし、亡命が可能な身であれば安全なところで執筆するの

が作家の務めではないかという考え方もある。しかし、それ以上に、綱渡りの日々を何とかくぐり抜けた精神の強靱さこそ注目される。

焚書の対象になったのは『エーミールと探偵たち』を書いたからではなかった。数々の風刺的な詩や『ファビアン』のような見方によっては退廃的にも見える描写とファシズム批判が暗示された内容ゆえであり、焚書の対象にされたのもそれまでの四冊の詩集とこの『ファビアン』であった。

その意味では、ケストナーはもともと“詩人として”ナチスからマークされていたのである。ドイツ国内での出版が禁止されてから、ケストナーはスイスの出版社から児童文学作品を出版し続ける。その児童文学作品には、脈々と、小さき者への、弱い者への、貧しい人々へのエールがあり、権力への批判がある。内心に秘めた叙情的な気骨＝リリシズムがそれらの児童文学を生んだのであり、特殊な状況下であって、詩人としての可能な限りの「抵抗」であった。

主な児童文学作品からその社会意識をみてみよう。

## 5. 『エーミールと探偵たち』

1928年の刊行。この三年前にヒトラーは国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）を設立し、この年、ナチスは国会に12議席を獲得している。日本は昭和3年。関東軍によって張作霖爆殺事件が起こされている。

エーミールはドイツのとある町の少年。板金工をしていた父は五歳の時に亡くなり、母が自宅のリヴィングで美容師をして、エーミールを育てている。

エーミールはおばあさんにお金を届けるためにベルリンに向かう汽車に乗る。初めての一人旅。母がこつこつためた140マルクはこの親子にとっては大金である。ベルリンまでは七時間の旅。ところが、眠って目ざめるとお金がない。個室の向かいに座っていたグルントアイスと名乗る山高帽の男が取ったのに違いない。男は今しもベルリン

の改札を抜けるところ。エーミールは尾行を開始。おとなに面と向かって泥棒と言っても体よくあしらわれるだけだろう。ともかく後をつけよう。男はカフェテラスに入った。見張っているエーミールにグスタフという少年が話しかける。事情を知ったグスタフは早速仲間の男の子たちを連れてくる。頭の切れる「教授」やちびのディーンスターク——ちなみにDienstには「尽力」や「助力」という意味がある——ほか20人以上もいる。

少年たちは連絡係など係を決めて、山高帽の男を追いつめる作戦を立てる。間もなく、エーミールのいとこの女の子ポニーも合流。こうして、手に汗をにぎるハラハラドキドキの物語が展開され、最後は百人もの子どもが追いつめて巡査を呼んで男を逮捕する。このことは新聞でも話題になり、エーミールはお金をとり返したうえに、男が銀行破りの犯人であり捕まえた人には賞金が出るようになっていたために、千マルクをもらえることに。

このケストナーが初めて書いた本格的な少年向けの物語から私たちは、ヴァイマル共和政<sup>(注11)</sup>の大都市ベルリンの風景と社会の片鱗を味わうことができる。第一次世界大戦の後、敗戦のどん底から復興しようとする国の首都。わが国でもそうだが復興とはすなわち豊かさの実現を意味するものではない。ともすれば貧富の差の拡大や望ましくない環境の変化を併せ持つ。ケストナーは、貧しい片親の家庭をメインに据えて、そこからの視線で社会を描いている。主人公の母は、アパートの自宅の居室で美容師を営んでいる。その息子は美容に使うお湯をわかす薬缶を運ぶ係だ。主人公に協力する少年たちも、金持ちで気取っているような子はいない。みんなエーミールのためにひと肌ぬぐ友情の持ち主だ。

こうした低所得者階層に足場を置くケストナーの視線こそが、彼の作品世界を味わい深いものにしていく。実際にもケストナーの父はドレスデンの皮職人で、母は物語と同じくアパートの寝室の隅に美容コーナーを作って美容師を営んでいた。

20世紀初頭、父も母も資本主義の大波におそわれながら懸命にケストナーを育て、ケストナーもそれを肌で味わって育った。そのようなケストナーの物語に描かれるのは、中世から鍛えられてきたところの「市民」だ。

「市民」はドイツ語ではBürger。領主の居城としてのSchloß「城(館)」とは異なる、城壁を持った空間であり避難所の意味も持つBurg(城廓)を語源とするBürgerには「市民」としての自覚が籠められている。ヨーロッパ中世の優れた研究者である阿部謹也はその著書で「都市の自由とは、このように流入する人々が、かつて人格支配を受けていた農村の領主から自由となることを意味していたのみでなく、都市内の様々な生活において領邦君主の恣意的支配下におかれぬ、ということも意味していた。」と述べている<sup>(註12)</sup>。奴隷状態から逃れ、人間としての権利を確保する場所として都市があった。だから都市としてのBurgは、日本の天守閣のような城にはではなく、市民の暮しを守る城壁とその内部空間に重きがあった。むろん、負の側面も様々にあったが、その城壁内に暮らす人々には、困っている人を助けたり協力して助け合う「市民」としてのモラルが育ったのである。この『エーミールと探偵たち』の登場人物たちを支えているのもそのようなモラルであり、エーミールやグスタフや「教授」やポニーの振る舞いの基本にあるのは良き「市民」としてのそれだ。そのまったくニュートラルに尊ばれるべき品性は、間もなくナチスの抬頭によって圧迫を受け始めるのだが、この作品は、その圧迫を受ける前の「ニュートラルな価値」を光らせている。

## 6. 『点子ちゃんとアントン』

1931年の刊行。1919年に帝政を廃して誕生したヴァイマル共和国は「ヴァイマル憲法」という理想を抱きながらも左右両派の確執に揺れつづけ崩壊の危機に瀕している。ナチスは32年には国会での勢力を拡大し、33年にはヒトラーが

首相となっている。そのような状況の中でケストナーは『ファビアン』を書き続ける一方でこの少年少女むけの物語も書いていたわけである。

主人公の点子ちゃんはお金持ちのポグゲ社長の娘だ。住み込みの養育係アンダハトさんがいる。二人は犬のピーフケと一緒に散歩に出るのが日課だ。ところが途中でアンダハトさんはダンスに行き、点子ちゃんは友達のアントンの処に行く。夕方に待ち合わせて一緒に帰ることを示し合っている。アントンはボロアパートに病気がちのお母さんと暮らしていて家事もこなす少年。アンダハトさんがようやくみつけた婚約者ローベルトは柄が悪い。点子ちゃんの家の見取り図を要求しているところが怪しい。それはそれとして、ベルリンの街中にある橋に夜な夜な「マッチ売りの少女」が現れる。盲人用のメガネをかけた貧しい身なりの女とぼろをまとった女の子の二人組。女の子が「あわれと思召してマッチを買ってください」と声をはりあげている。向かい側の通りではアントンが靴紐やマッチを売っている。小銭を得た一同は安食堂で一休み。女の子は点子ちゃん、貧しい女はアンダハトさん。アントンにとっては稼ぎは母子で暮らすための切実な収入だ。アンダハトさんは悪い婚約者に貢ぐため。点子ちゃんはアントンを助けるため。三者三様の理由による物売りである。

アントンは点子ちゃんの話から家の見取り図が狙われていることに気づく。

一方、アントンの母さんは自分の誕生日を息子が祝ってくれることを楽しみにしていたのに、息子が忘れていた様子に気落ちしている。その日も遅くなってそのことに気づいたアントンは自分の至らなさに失望して家を飛び出す。母さんはそんなアントンを探して点子ちゃんと町を尋ね歩く。アパートに戻ると小さなプレゼントを手にしたアントンが。抱き合う母と子。

一方、点子ちゃんの父・ポグゲさんは、娘が怪しい行動をしているという告げ口を受けて、ある夜、こっそり家を出る点子ちゃんとアンダハトさ

んの後をつける……。

この作品は、ケストナーの児童文学作品の中で最も「社会」というものへの構造的な学びが得られるものとなっている。それも教科書的なものではなく、年少者がごく自然に現実社会の在り方へ思いを馳せることが出来るようになっている。

富裕な家庭と貧しい家庭が登場する。これによって読者である子どもたちは社会の在り様を知ることだろう。点子ちゃんがアントンに肩入れするのは、相手が貧しいからではない。人間として尊敬しているからだ。お雇い家庭教師のアンダハトさんが立派でもなく悪人でもないところがよい。加えてアントン母子の愛情が浪花節的に涙腺をしぼる。最初から描かれていくエピソードが無駄なくラストに向かって絞られていく。ケストナーはここでも、貧しい人に、心の清らかな人に寄り添っている。かといって金持ちを馬鹿にしたりはしない。ポツ社社長は点子ちゃんの「俠気」の良さ理解者である。物語は子どもたちの手柄によって、大団円を迎える。この物語を少年期に読めた子どもたちは幸せだと思う。

そして、この物語には1930年頃のベルリンの街角がふんだんに登場する。この本が出された翌1932年、ナチス党は国会に230の議席を獲得。ヴァイマル共和政の国防相が親衛隊や突撃隊の行動に禁止命令を出すのが逆に失脚させられ、ハーケンクロイツが国中にひるがえるようになる。

## 7. 『飛ぶ教室』

1933年刊行。この本を最後にケストナーはドイツ国内での出版を禁止される。前述したように五月に行われたナチスによる「焚書」ではケストナーの本もその対象になった年でもある。

キルヒベルクにあるギムナジウム<sup>(注13)</sup>の寄宿舎が舞台。高等科一年のマルチンは奨学金を受けている勤勉家で成績は首席。マチアスは勉強は苦手だが腕っぷしは強い。ヨーニーは「飛ぶ教室」

という題のクリスマス劇の作者。生徒たちは、クリスマスに体育館で演じる芝居の稽古に打ち込んでいる。

そこへかねて対立している実業学校の生徒たちにギムナジウムのクロイツカムが捕虜になったという知らせ。マルチンたちは、日ごろ慕っている禁煙先生に相談。結果、集団での乱闘はやめて代表同士の決闘に。これにマチアスが勝利。

しかし、実業学校の生徒たちが承服しなかったために、結局、集団での雪合戦に。これに勝ったものの寄宿舎の舎監ベク先生に叱られる。この正義先生と呼ばれる先生は、生徒たちが仲間を救い出すための行為を認め、寛大な処分を施す。そして、二十年前のあるエピソードを語る。ひどい病気で入院した母親を心配して規則を破って度々寄宿舎を抜け出した少年がいた。少年は厳しい舎監に監禁室に閉じ込められたが、見まわりに行くと、そこには別な少年が身代わりに入っていた。ついに校長が少年から事情を聞いてその行動を理解した。

こうしたことから、この時寄宿舎を抜け出した少年は将来、生徒たちから悩みを打ち明けられる舎監になろうと決意。正義先生は替え玉になった少年と親友だったが、大人になって妻を失ったその友人は心に痛手をおって姿を消してしまったという。この話を聞いて生徒たちは正義先生への信頼を深めるとともに、二十年前、替え玉で監禁室に入ったのは、今、学園の隅の禁煙車両で暮らす禁煙先生ではないかと推理した。

寄宿舎の生徒たちはクリスマスには自分の家に帰りそのまま正月を迎える。しかし、マルチンのもとには旅費を送れないという母からの手紙。涙するマルチン。

そして、この年最後の授業の日、12月23日がやってきた。夜、生徒たちによって「飛ぶ教室」の芝居が上演された。これまでは正式な職員ではなかった禁煙先生は、正義先生の申請により、学校の校医となることが決まり、二人の親友は同じ学校で働くこととなった。そして、24日、生徒たちはみんな嬉しそうに学校を出て行った。ぼつ



んと残っているマルチンに正義先生は、旅費を手渡す。折しも雪が降りだした。マルチンの故郷では、父親と母親が寂しいクリスマスを迎えようとしていた……。

この作品が、今も読まれ続けているのはどうしてだろう。まず、読み終わって感じるのは「ああ、これはクリスマス物語なんだ」ということだ。ギムナジウムのクリスマス劇の練習に始まり、その上演までの日々が背景になっている。そこで展開されるエピソードにわくわくさせられる。実業学校の生徒たちとの対決は、鈴木清順監督の『けんかえれじい』のような日本の旧制中学校を彷彿とさせるが、寄宿舎制度の歴史は欧州の方がずっと年季が入っている。

つまり、少年たちを規制する見えない枠がここにはある。それは、歴史的なものであるし社会的な構造につながっている。その枠を少年たちが乗り越えていく。そこにこの物語の魅力がある。いくつかのエピソードはすべて「禁止」や「規則」に対して抗う方向性を示している。実業学校の生徒たちとの喧嘩も、「禁煙先生」はそれを止めようとはしない。ただ、集団での乱闘ではなく代表者同士の道具を使わない紳士的な決闘で決着させる。このことからわかるように、「禁止」や「規則」に対して暴力的な破壊をすることを望んでいない。人間としての尊厳を保ちながら、そこから自由になろうとする。それこそがケストナーの立ち位置なのだ。

折しも、ナチスが権力を掌握し、次々と「禁止」につながる身勝手な「規則」を法案として成立し始めていた。ケストナーはその危険な流れを敏感に察知していた。この作品そのものに表立った当時の体制批判はない。しかし、ケストナーが抗わなければならないとした本質的なことはたっぷり盛り込まれている。中でも、物語の半ばで語られる舎監の正義先生の若かりし日のエピソードは、規則と人間的な行動の関係を示している。これは、実際にケストナー自身の体験を書き込んだというだけあって説得力を持っている。二十年前の

厳しいだけの舎監とは違い、正義先生は生徒たちの校則違反に粹な処分をする。それは、何よりも正義先生が、中等高校生だったころの気持ちを忘れていないからだ。なんと現代の世の中には、あの十代の日々の心を忘れている大人たちの多いことだろう。

## 8. おわりに

ケストナーは、強烈な反体制の行動はしなかったかもしれない。当時、ドイツのみならずナチス支配下の国で、そのように行動した文化人は、たちまち捕らえられ収容所に入れられ死に追いやられた。また、多くの文化人が国外に亡命した。しかし、ケストナーは、国内にとどまり、ナチスに迎合することなく、生きのびた。その作品の底流には、権威批判がある。富裕者層への批判と風刺がある。彼の基本的なスタンスは、低所得者層に思いやりを持った市民階級にある。普通の暮らしが大事という言葉は得てして、体制に対してカドを立てないという形で現状維持につながっている。しかし、ケストナーは、絶えず風刺的な詩、都市に生きる人間たちのカオスを描いた小説、そして児童文学作品から批判の言葉を放ち続けた。戦後は、早い段階で原爆批判の声をあげ、晩年はベトナム戦争反対の意思表示もした。

私は思う。エーリヒ・ケストナーの文学は社会に対峙するしなやかで強靱な姿勢として、今こそ、振り返られるべきものではないだろうか。その強靱さの中心にあるのは、子どもの心に寄り添うリリズムなのである。

その心の強さを支えているものは何なのか。それは、初期作品『小さな男の子の旅』にあるような、子どもの心を手放さない精神の在り方、そして一見叙事的に見えながらリリズムに支えられた詩に込められている叙情的精神、それが彼を支えていたのだと思う。

## 【注】

1. エーリヒ・ケストナー=1899年ドレスデン生まれ。主に詩人、児童文学作家として活躍。平和主義者として多くの社会的発言を行った。1974年没。
2. 焚書事件=1933年5月10日、ドイツ各地で、ナチス突撃隊及び親衛隊によって行われた。焚書の対象となったのは、マルクス、フロイト、ブレヒト、トーマス・マン、ハインリヒ・マン、ツヴァイクら、文学史・思想史に欠かせない作家、詩人、思想家たちであった。
3. ナチス=Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei 国家社会主義ドイツ労働者党。1919年設立。アドルフ・ヒトラーを総裁として国会の議席を増やし1933年1月、独裁政権を獲得した。
4. エルンスト・トラウ= (1893-1939)。詩人として『燕の書』、劇作家として『変容』などがある。ナチスから追放されて亡命し病氣と貧困のなかニューヨークで自殺。
5. たとえばスヴェン・ハヌシェクの『エーリッヒ・ケストナー』にはたびたび「かれの抒情詩」という表現がみられる (157頁ほか)。
6. speの意味と文脈の解釈については、ケルン大学教授モニカ・ウンケルの教示を得た。  
また、岸美光は『大きなケストナーの本』所収の「鉄道のたとえ話」で「未来の現在に向かって」と訳している。
7. スヴェン・ハヌシェクは『エーリヒ・ケストナー』において「ケストナーが1933年以降に自分の名前で発表したものは散文だけであり、『家庭薬局』に収められているのは、大半が古い作品だったのである。」と述べている。
8. ここでのインターナショナルは特定の組織ではなく“労働者のための国際的連帯”という概念を指していると考えられる。
9. ホロコースト=ナチスによる主としてユダヤ人の大量虐殺。犠牲者は600万人に及ぶとみられている。ほかにポーランド人、ドイツ国内の反体制派なども殺害された。
10. 『あのころはフリードリヒがいた』=戦時中に少年期を過ごしたハンス・リヒターが書いた小説。ナチスがどのようにユダヤ人を追い込んでいったかという過程が細やかに描かれている。岩波少年文庫。
11. ヴァイマル共和政=1919年に成立したドイツの共和政。皇帝を退位させた民主制であったが、

労働者中心の左翼勢力と右翼ファシズム勢力の闘争の果てに1933年には崩壊しナチス独裁政権の誕生を生むこととなった。

12. 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男～伝説とその世界』は、13世紀のハーメルンを中心にドイツの都市の成り立ちとその性格を述べている。
13. ギムナジウム=ドイツの高等中学、10歳から19歳の9年制であり戦前は寄宿舎制度をとっているところが多かった。現在は8年制。

## 〈参考資料〉

1. Erich Kästner “Doktor Erich Kästners Lyrische Hausapotheke: Gedichte für den Hausbedarf der Leser” (Atrium Verlag: Zürich)
2. スヴェン・ハヌシェク『エーリヒ・ケストナー～謎を秘めた啓蒙家の生涯』(藤川芳朗訳、白水社)
3. ユルゲン・ゼルケ『焚かれた詩人たち』(浅野洋訳、アルファベータ)
4. クラウス・コードン『ケストナー～ナチスに抵抗し続けた作家』(那須田淳／木本栄訳、偕成社)
5. シルヴィア・リスト編『大きなケストナーの本』(丘沢静也・岸美光・初見基訳、マガジンハウス)
6. 高橋健二『ケストナーの生涯』(駸々堂)  
エーリヒ・ケストナー『ケストナーの終戦日記』(高橋健二訳、駸々堂)
7. エーリヒ・ケストナー『ケストナー博士の叙情詩家庭薬局』(高橋健二訳、方英社)
8. エーリヒ・ケストナー『人生処方詩集』(小松太郎訳、ちくま文庫)
9. エーリヒ・ケストナー『小さな男の子の旅』(榎直子訳、小峰書店)
10. エーリヒ・ケストナー『ファービアン』(小松太郎訳、東邦出版)
11. エーリヒ・ケストナー『ファビアン あるモラリストの物語』(丘沢静也訳、みすず書房)
12. エーリヒ・ケストナー『子どもと子どもの本のために』(高橋健二訳、岩波書店)
13. 生野幸吉・檜山哲彦編『ドイツ名詩選』(岩波文庫)
14. 池内紀『自由人は楽しい～モーツァルトからケストナーまで』
15. 『ケストナー少年文学全集・全9冊』(高橋健二訳、岩波書店)
16. 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男～伝説とその世界』(筑摩書房)